

ばか殿様にごちそうするはなし (八)

むかしむかし、ばか殿さまがいたんだとお。毎日ぜいたくな日を送っているのにあきがきて、それよりもつとうまいものを食べたいと、領内にお布告をだし、「わしの氣に入ったごちそうをしてくれた者には、ウンとごほうびをとらせてつかわす。」ということになったんだとお。それを聞いてみな衆はほとほと困ってしまったんだとお。「あのばか殿さまは酒よさかなよとうまいものを食っていべい。わしらのような貧乏百姓にそんなお布告なんか、どだい無理というもんだ。」「そうだ、そうだ。」とだれも殿さまをよぶといいだすものはいなかったとお。ところが一人たいそうとんちのいいものが出て、「そうだ、あれがいい。」とみんなに耳打ちしたとお。みな衆もあいづちを打ち、いよいよ殿さまをよぶことになったんだとお。殿さまもたいそう上きげんでやってきて、「こら早くうまいものを座敷にはこべ。」と居催促。殿さまは今はいくか、今はこんでくるかと待ったが、百姓たちは「いまうまいものをとりよせ最中で少しお待ち下さりませ。」となかなか膳をはこぶ様子がみえなかったんだとお。もうお昼もすぎて殿さまのおなかもペコペコで、つばをのんで我慢して待ったとお。そうして待つうちにやつと膳がはこばれてきたんだとお。どんなうまいものを百姓どもは食わせてくれるのかと殿さまは、さっそくお椀のふたとつたとお。麦めしに菜っぱ汁にたくあんづけ。殿さまは一目見てたいそう怒ったが、あまりに腹がへっているので、百姓どもといっしょにこの麦めしに初めてはしをとつたとお。ところがかめばかむほど味がでてくるし、菜っぱのみそ汁も今まで食ったことのない淡泊なうまさに初めて舌鼓を打って「百姓どもはぜいたくな食べ物づくめでくらししているのう。こんなものを年中わしにも食べさせろ。」と、たいへんごほうびをとらせただとお。